

2020年5月3日

東京聖三教会

私が来たのは、
羊が命を豊かに受けるためである。



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

2020年5月3日
東京聖三教会

使徒 6:1-9, 7:2, 51-60
1 ペテロ 2:19-25
ヨハネ 10:1-10

私が来たのは、羊が命を豊かに受けるためである

司祭 シモン 林永寅

今日ご一緒に読んだ使徒言行録には初期のエルサレムの教会で奉仕者たちを選び、按手し、その奉仕者の中の一人であるステファノが最高法院に連れて行かれ、殉教する場面が記されています。ステファノは信仰者として最後までイエス様のみ言葉通りに生きました。

この使徒言行録には注目される二つの場面があります。それはまず、当時の信仰者たちがエルサレムの貧しい人々のために食事をもてなしていたということです。これをギリシア語でディアコノス、すなわち奉仕と言います。これが最初の社会宣教であるとも言われています。しかしそこでギリシア系のユダヤ人とヘブライ系のユダヤ人の間に葛藤が生じました。日々の割り当てについてギリシア系のやもめたちが軽んじられたということです。教会はこの問題を解決するために、この仕事を受け持つ7人の奉仕者を選びました。

もう一つ注目されるのは、この仕事を受け持つ7人の奉仕者を選ぶ基準です。世間的な考え方からすれば、食事の世話をするためですから、心身ともに健康で暖かい心で貧しい人たちに接し公平に分け与えることができる人なら良いと思うでしょう。ところが、当時の信仰者たちの考えは違いました。彼らは、「信仰と聖霊に満ちている人々を選びました」。信仰を大事に思っていたのです。使徒たちは、「私たちが、神

の言葉をないがいろにして、食事の世話をするのは好ましくない」(使徒 6:2)と言いました。

当時の信仰者たちがどれほど信仰を重んじていたのかは、奉仕者として選ばれたステファノのその後の人生の姿から確認できます。ステファノは、ユダヤ人の指導者たちが集まっている最高法院に連れて行かれました。とても厳しい状況でした。けれども彼はそこにでも揺らぐことなく福音を宣べ伝えました。彼が宣べ伝えた福音の内容は旧約聖書の核心的な内容であり、非常に優れた説教でもあります。ステファノは揺るぎない信仰を持ち、聖書について博識だったのです。ところでなぜ、当時の信仰者たちはこのような奉仕の仕事に「信仰と聖霊に満ちている人」を選んだのでしょうか。それは、この奉仕の仕事も福音を宣べ伝えるための働きであり、宣教活動であるからです。

それでは、当時の信仰者はふだん何をしていたのでしょうか？ それは使徒言行録に記されている信徒たちの姿から分かります。使徒言行録にはこのように記されています。

「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」(使徒 2:42)

ここの、使徒の教えというのは聖書の勉強、相互の交わりというのは信徒の交わり、パンを裂くことというのは聖餐式を意味します。即ち、当時の信徒たちは聖書の勉強、交わり、聖餐式、そしてお祈りに熱心であったのです。これが、今日にも続けられている教会の働きであり、信仰生活の中心であり、信仰者の日常的な生活でもあります。

残念ながらコロナウイルスの状況が厳しいので、教会でともに聖餐式をささげることができない日々が続いています。しかし、それぞれの家で、聖餐式に出席すること以外の信仰活動は続けることができます。つまり、教会でともに聖餐式をささげることではできなくても、YouTubeを通して主教様の司式の聖餐式の場面を見ることはできますし、聖書を読むこととお祈りは家でもできるのです。そして教会で顔を合わせて交わりを持つことはできませんが、電話で安否を尋ねながら

交わりを持つことはできるでしょう。

今日のペテロ書には、困難を共に経験している私たちに勇気を与えてくれるみ言葉がこのように記されています。

「不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それはみ心に適うことなのです。」(1 ペテロ 2:19)

私たちが困難の現実の中にも、聖書と交わり、そしてお祈りを続けていけば、神様は私たちに祝福と恵みを持って報いてくださるでしょう。

また、今日ご一緒に読んだ福音書に記されているイエス様のみ言葉も、私たちに大きな力となり、慰めになります。福音書にはこのように記されています。

「私は門である。私を通して入るものは救われる。その人は門を出入りして牧草を見つける」(10:9)

イエス様が、「信仰者とイエス様との関係」を「羊飼いと羊」とに喩えられたのは、イスラエルの民らが長い間遊牧生活をやってきたからでしょう。けれどもファリサイ派の人々はイエス様のみ言葉を理解できませんでした。それは、彼らが羊飼いたちと羊の群れの暮らしについて知らなかったからかもしれません。

当時の羊飼いたちは、羊の群れを連れて草のあるところを転々としてきました。そしてあるところには石垣を築いて共同の羊の囲いを作りました。夕方になると、羊飼いたちは羊の群れをこの囲いに追い込み、門番を決めて羊の群れを守りました。そして門番をする羊飼いは、自分の身体で入口を塞いで夜を過ごしたそうです。ですからイエス様が「私は羊の門である」とおっしゃったみ言葉は、イエス様が羊の群れを守る羊飼いであるという意味なのです。私たちにとっては、すべての危険と災いから守ってくださるという意味になります。そしてイエス様のみ言葉を聞いて従う時、救いの門に入ることもできるという意味にもなります。

一般的に羊は大人しいと言われます。しかし独特な性格もあるそうです。羊は、草もなく飲み水もないところをさまよう特性があるそうです。また、怖がりであり、敏感で少しでも怖い状況であれば決して横になら

ないそうです。羊の群れが集まっている際も、他の羊に邪魔されなくなって初めて横になるそうです。そして、ひもじさにも敏感です。お腹が減っていたら決して横にならないと言います。ですから、いつも羊飼いの世話が必要であると言います。

けれども、これらのことは羊だけの特徴であるとは言い難いでしょう。考えてみれば人々も同じです。人々も恐れ、寂しさ、不安、ひもじさがあれば、ゆっくり休むことができません。時折草も飲む水もないところで彷徨ったりします。なので、私たちにも羊飼いが必要なのです。イエス様は、このような私たちのために「私は門である」とおっしゃいながら、「私を通して入るものは救われる。その人は門を出入りして牧草を見つける」(10:9)とおっしゃったのです。ですから、私たちはイエス様のこのみ言葉を通して安心できるのです。

当時の羊飼いは夜が明けると、羊の囲いにいる羊の群れをそれぞれ呼び出して草地に連れていきました。群れの羊は鈍い動物ですが、不思議なことに、共同の囲いの中に、他の羊飼いの羊と共にいたとしても、自分の羊飼いの声を聞き分け、ついていくそうです。私たちはどうでしょうか？ 羊は生まれつき、自分の羊飼いの声を聞きわけることができますが、私たちは自分を命の道へ導くみ言葉を聞きわけるためには努力が必要です。その努力は他ならぬ聖書のみ言葉を勉強することです。聖書を通して私たちは、救いと命の道へ導いて下さるまことの羊飼いであるイエス様の声を聞きわけることができます。そしてコロナウイルスの状況の中で感じる恐れと寂しさ、不安を乗り越え、希望と勇気を得ることができます。

イエス様はご自分がこの世にいらっしゃった理由をこのように教えてくださいました。

「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」(10)

このみ言葉を通して勇気と力を得、私たちが経験している現実をも共に乗り越えていきましょう。イエス様のこのみ言葉を信じて従うなら、

今日ご一緒に読んだ詩篇のみ言葉のように、「神様はわたしたちを緑の牧場に伏させ、憩いの水辺に伴われる」でしょう。そして私たちの「魂を生き帰らせる」でしょう。

この一週、私たちを緑の牧場へ導いてくださり、豊かな命を与えてくださるイエス様の恵みが、皆さんと皆様の家庭に豊かに溢れますようにお祈りいたします。